

実践報告

家庭科における知識・技能と活用する能力との関係に 関する考察

— 布を使った物づくりの製作計画と製作物の分析を通して —

三好 智恵* ・ 岡 陽子**

A Study of the Relation Between "Knowledge and Skills"
and "Ability to Utilize Them" in Home Economics Education:
Through the Analysis of Making Plans of Cloth Goods and the End Products

Tomoe MIYOSHI and Yoko OKA

【要約】

学んだ知識・技能を活用して生活を工夫する力の育成を目指して、まず、必要な知識・技能の明確化と習得のための共通課題に取り組み、その後、知識・技能を活用して個々の課題解決に向かう構成で授業を行った。この活用場面における児童の製作計画と製作物を分析した結果、2枚の布を中表にして縫うための知識・技能の概念化の必要性や活用場面を通して製作計画には見られない創意工夫する能力が高まることなどが明らかとなった。

【キーワード】

知識・技能、活用する能力、創意工夫する能力、実践力

I. 目的

学習指導要領において、家庭科では、実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることが示されている。この基礎的・基本的な知識及び技能は、日常生活に必要なもの、応用・発展できるもの、生活における工夫・創造につながるものとされている。さらに、身に付けた知識・技能を活用して、生活をよりよくしようと工夫する能力を高くすることが求められている。

平成28年8月に公表の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告)」(中央教育審議会)においても、知識・技能と思考力・判断力・表現力が相互に関わり合っていることが示されている。また、実生活に活用できる知識・技能の必要性も述べられている。

本校の家庭科では、学習したことを家庭実践につなぐために、題材の中に知識・技能を活用して

思考・判断・表現する場面を設定している。また、2年間で身に付けるべき基礎的・基本的な知識・技能を系統的に示して学習に取り組ませている。しかし、必要な知識・技能を学習したにもかかわらず、活用する場面でそれらの知識・技能を十分に活用できないことがある。

そこで、本研究では知識・技能と活用する能力との関係について検証し、効果的な指導の在り方について考察する。

II. 方法

本研究では、第6学年の題材である、「思いを形に 生活に役立つ布製品」を取り上げ、次の方法で研究を進めた。

1. 題材における知識・技能の明確化

2年間の製作の内容を整理し、第6学年「思いを形に 生活に役立つ布製品」の題材において身に付けるべき基礎的・基本的な知

*佐賀大学教育学部附属小学校

**佐賀大学学校教育学研究科

識・技能を洗い出す。

2. 「思いを形に 生活に役立つ布製品」の題材構成の検討

「知識・技能を活用する場面」を位置付けた題材構成を検討する。これらの場面で必要となる知識・技能は、前時までに学習ができるように構成する。

3. 授業実践及び分析

授業を実施し、授業後のワークシートの記述の整理及び製作物の分析を行い、知識・技能の活用の実態を分析・考察する。

4. 1枚ポートフォリオでの関心・意欲の分析

1枚ポートフォリオの記述を基に、製作に対する意欲について分析・考察する。

Ⅲ. 研究の実際

1. 題材における知識・技能の明確化

本題材においては、生活を快適にしたり、便利にしたり、楽しい雰囲気にしたりとといった目的に応じた布製品を製作することができるようなることを目指している。そのためには、形や大きさを工夫したり、縫い方や

表1 製作における基礎的・基本的な知識・技能 ◎は重点事項 ○は取り扱い事項

学 年				5年		6年	
題 材				ひと針に心をこめて	ミシンにトライ！手作りで楽しい生活	思いを形に生活に役立つ布製品	
時 間				9	15	14	
指 導 項 目	C(1)衣 服の着用と 手入れ	ア	衣服の働きと着方				
		イ	手入れ・ボタン付け・洗濯	◎			
	C(2)住 まい方	ア	整理整頓・清掃				
		イ	住まい方の工夫				
C(3)製 作	ア	製作計画	○	◎	◎		
	イ	手縫い・ミシン	◎	◎	◎		
	ウ	用具の取り扱い	◎	◎	○		
その他					A(3)ア・D(2)ア	A(3)ア・D(2)ア	
実習題材				ワッペン コースター 小物入れ オリジナル布製品	ランチョンマット 学級で役立つ布製品 家庭で役立つ布製品	ブックバック 学校で役立つ布製品 家庭で役立つ布製品	
製 作 に 関 す る 基 礎 的 ・ 基 本 的 な 知 識 及 び 技 能	C(1)	イ	ボタン付け	◎			
		ア		ゆとり			◎
			縫いしろ		◎	◎	
			製作手順	○	◎	◎	
			製作計画	○	◎	◎	
			型紙		◎	◎	
			布の種類や特徴	○	◎	◎	
	C(3)	イ		針の扱い方	◎		
				玉結び・玉止め	◎		
				なみ縫い	◎		
				返し縫い	◎		
				本返し縫い	◎		
				半返し縫い	◎		
				かがり縫い	◎		
				しるしを付ける	◎	◎	◎
				布を断つ	◎	◎	◎
				まち針をうつ		◎	◎
				しつけをする		◎	◎
				ミシンの名称		◎	◎
				直線縫い		◎	◎
				返し縫い		◎	◎
				針を刺して方向転換		◎	◎
		二つ折り・三つ折り		◎	◎		
ウ		針類(安全)	◎				
		はさみ類(安全)	◎	○	○		
		ミシン(安全)		◎	○		

製作手順を考えたりしなければならない。

まず、学習指導要領を基に、製作における2年間の指導内容及び身に付けるべき基礎的・基本的な知識・技能をまとめた(表1)。

表1に示したように、第6学年の題材では、余裕をもって出し入れができるよう「ゆとり」が必要なことを新しく学習する。また、製作にあたっては、目的に応じた布製品を完成させるために、「丈夫さ」「美しさ」「役に立つ」「製作時間」の視点をもって取り組ませる。そのために必要な知識・技能を、以下の4点とした。

- ・布端の始末を考えることができる。
 - ・布のどこを縫うか考えることができる。
 - ・目的に合った形や大きさを考えることができる。
 - ・時間内に手順よく製作することができる。
- これらを、本題材における知識・技能とした。

2. 「思いを形に 生活に役立つ布製品」の題材構成の検討

「知識・技能を活用する場面」を中核に据え、その場面で必要とされる知識・技能を前時までに確実に学習できるような題材構成とした。題材構成時に配慮したのは、以下の4点である。

- ・第6学年家庭科の総時数を踏まえ、本題材の授業時間は14時間以内とする。
- ・題材の導入時に布製品への関心を高め、題材末では家庭実践への意欲を高める。
- ・製作に必要な知識・技能を学習した後に、それらの知識・技能を活用する場面を設定する。
- ・活用する場面は、ペアやグループで取り組む課題と個人で取り組む課題をそれぞれ設定し、段階的に活用する能力を高める。

以上のことを踏まえ、本題材においては、「活用する場面」を2場面(活用する場面①、活用する場面②)設定した。次にその概要を示す。

(1)活用する場面①

「教室の中で使って役に立つ布製品の製作」という共通のテーマのもと、ペアで製作に取り組ませる。効果として考えられるのは、次の5点である。

- ・学校生活という共通の場面を取り上げることで切実感が増し、主体的な学びをつくる。
- ・他者と関わることで自分の考えをもち、自分を見つめることができる。
- ・同じ目的のため対話が充実し、思考の深まりとともに協働的な学びとなる。
- ・友達から新たな視点を獲得することができる。
- ・協力することで課題の達成を容易にする。

(2)活用する場面②

自分の家庭に目を向け、個人で製作に取り組ませる。効果として考えられるのは、次の3点である。

- ・家庭生活を取り上げることで、自分の生活の課題に目を向けることができる。
- ・学習した知識・技能を家庭生活の中で活用することができる。
- ・個人で取り組むことで、1人の力で課題を解決する場となる。

以上のように、活動する場面を2度繰り返すことにより、活用する能力を高めるとともに、布製品の製作への関心・意欲を高め、知識・技能の定着を図ることができる考える。

各授業で育む資質・能力の関係については、表2のとおり、矢印で示している。活用する場面①、②において必要となる知識・技能は、2～3時目のブックバックの製作において学習するよう計画した。活用場面としては、「学校で使って役立つ布製品を作ろう」(活用する場面① 5～9時目)と「家庭で使って役立つ布製品を作ろう」(活用する場面② 10～13時目)の2場面を設定している。また、製作した布製品を家庭で使用した後に報告会を設定して、自分の実践を振り返るとともに、他者の実践から学び、家庭実践への意欲を高める場とした。

表2 活用する場面を取り入れた題材計画

過程	時間	学習活動	教材	関心・意欲・態度	創意工夫する能力	技能	知識・理解
み つ め る さ ぐ る	1	布製品のよさを見つける	ブックバック	①ブックバックなどの生活に役立つ布製品に関心をもっている。			
	2 3 4	ゆとりの必要性を知り、製作する		②丈夫で美しい直線縫いの仕方や、目的に合った大きさのためにゆとりを持たせることの必要性が分かる。 ・布の選び方 ・型紙の作り方 (縫い代・ゆとり) ・布端の始末の仕方 ・製作の手順 ・ミシンの扱い方 ・直線縫いの仕方			
ふ か め る	5 6	学校生活で使って役立つ布製品を考え、製作計画を立てる	学校で役立つ布製品	⑤意欲をもって布製品の製作に取り組もうとしている。	⑥学校生活で使って役立つ布製品を作るために、丈夫さ、美しさ、役に立つ視点で考え、製作計画を立てている。	③④製作計画に沿って、丈夫で美しく、物の出し入れがしやすいブックバックを製作することができる。 ・しるしをつけ、裁つ ・二つ折り、三つ折り ・しつけをする ・直線縫い・返し縫い ・持ち手を縫い付ける ・仕上げのアイロン	
	7 8 9	学校生活で使って役立つ布製品を作る			⑦⑧⑨丈夫に、美しく、役に立つ製品を作るために、縫い方や手順などを工夫して製作している。		
い か す	10	家庭で使って役立つ布製品の製作計画を立てる	家庭で役立つ布製品		⑩家庭生活に目を向け、家庭で使って役立つ布製品を作るために、丈夫さや美しさ、役に立つ視点で考え、製作計画を立てている。		
	11 12 13	家庭で使って役立つ布製品を作る			⑪⑫⑬丈夫に、美しく、役に立つ布製品を作るために、家庭で使用する目的に合わせて、縫い方や手順などを工夫して製作している。	⑪⑫⑬製作計画に沿って、丈夫で美しく、使いやすい、家庭で使って役立つ布製品を製作することができる。 ・美しい直線縫い ・丈夫な返し縫い ・丈夫に持ち手を縫う ・丈夫な布端の始末 ・仕上げのアイロン	
	14	報告会を行う		⑭生活に役立つ布製品の制作に意欲を高めている。			

3. 授業実践及び分析

ここでは、学習した知識・技能とそれらを活用する能力との関係を探るために、習得の場面(2～4時目)と活用する場面①(5～9時目)を取り上げて、それらの関わりについて分析を行う。

(1) 授業実践

①知識・技能の習得場面について

2～4時目では、活用する場面で必要となる知識・技能を習得させるために、ブックバックの製作を実施した。ブックバックの大きさは、児童が中に入りたい物によって違うため、布製品の大きさは各自違うものとした。

知識・技能の習得に向け、指導した内容は、表3に示す通りである。これらの知識・技能の習得時には、「丈夫さ」「美しさ」「役に立つ」という製作の視点と結び付けて取り組むよう指導した。特に、ゆとりについては第6学年において新しく学習する内容としているため、新聞紙で実物同様の大きさのブックバックを作製し、出し入れのしやすさについて確かめさせた。

表3 習得させた知識・技能

(●「丈夫さ」☆「美しさ」◎「役に立つ」視点)

製作の過程	指導内容(知識・技能)
①印を付ける 布を裁つ	◎ゆとりの必要性 ◎目的に合った形や大きさ
②縫う わき ↓ 出し入れ口 ↓ 持ち手	☆わきの縫い方 (中表にして縫う) ●☆出し入れ口の縫い方 (三つ折り) ●☆持ち手の付け方 ◎まちの縫い方
③仕上げる	

②活用する場面①について

5～6時目の製作計画を立てる際は、学校で使って役立つ布製品を製作するという課題を与え、その課題解決に向けた実習を行った。評価は、課題解決のために、学習した知識や技能を活用できるかという視点から、特に、「丈夫さ」「美しさ」「役に立つ」について工夫する能力を評価した。ワークシート(図1)に、「気を付けるところ」の欄を設け、●「丈夫さ」、☆「美しさ」、◎「役に立つ」の印と共に、これまで学習

した縫い方や手順などの知識や理解したことを活用して記入する欄を設けた。

【製作計画】		!マークを付けてまとめよう ●丈夫さ☆美しさ◎役に立つ	
手順	図	説明	気を付けるところ
するし・たつ		・布の上に型紙を置き、チャコえんびつでしるしを付ける。 ぬいしるしのしるしを付ける。 ・外側のしるしに沿って布をたつ。	入りたいものが 入る大きさに する。◎
ぬ		・ニ>折りにあみ ・左右のわきのしるし とあわせてぬう ・内表にしてぬう前にホ ットを付ける ・内表をぬう	内側に折 て糸が見え ないまじりに ぬう★
う		・出し入れ口の とニ>と三つ 折りにしてま ちりてとめてぬう	まっすぐにさ れいに★ぬう ほとけない よう反しぬ いをする●
仕上げる		・持ち手をつけ る ・はばをあわせ る ・まちをつける	
		・糸の始末をして、形を整え、 アイロンをかける。	しわがなくな るよう

図1 ワークシートの製作計画欄

表4に創意工夫の能力の評価規準を示した。「十分満足できる状況」(A)(以降「A評価」とする)は、「創意工夫の4項目」全てに着目して製作に取り組むことができたものとした。

表4 6時目の「創意工夫」の評価規準

十分満足できる状況(A) 「丈夫さ」「美しさ」「役に立つ」の工夫について考え、以下の4つの観点の、 <u>全ての項目</u> について考え製作計画を立てている。
評価規準(B) 「丈夫さ」「美しさ」「役に立つ」の工夫について考え、以下の4つの観点のうち、 <u>2～3項目</u> について考え製作計画を立てている。
努力を要する状況(C) 「丈夫さ」「美しさ」「役に立つ」の工夫について考え、以下の4つの観点のうち、 <u>1～0項目</u> について考え製作計画を立てている。
「創意工夫の4項目」 ・目的に合った形や大きさの工夫 ・製作物や目的に応じた布端の始末(二つ折り・三つ折り)の工夫 ・中表にして縫うことの活用 ・力がかかる場所などを丈夫に縫うことについての知識・技能の活用

また、「努力を要する状況」(C) (以降「C評価」とする)の児童に対する手立てとして、製作物に応じた手順や布端の始末などのヒントカードを用意し、ペアの児童と相談させたり、教科書で確認させたりした。

(2) 授業分析

①知識・技能の習得の状況(習得場面2~4時目)

知識・技能の習得を目標としたブックバックの製作では、表1に示した基礎的・基本的な知識及び技能を、製作を通して身に付けることができるよう配慮して授業を行った。必要な知識・技能は次の4項目(以後「知識・技能の4項目」という)である。

- ・ 目的に合う形や大きさについての理解と技能
- ・ 布端の始末(二つ折り・三つ折り)の理解と技能
- ・ 中表にして縫うことの理解と技能
- ・ 力がかかるところ(持ち手)を丈夫に縫うことの理解と技能

この習得場面(2~4時)では、製作計画作成時点での知識・理解の実現状況とブックバック製作後の作品に見られる理解と技能の状況を評価した。その結果は表5のとおりである。

表5 習得の場面(2~4時)の評価結果

評価方法【観点】	評価結果 人(%)
製作計画の記述 【知識・理解】	A 15人(39%)
	B 22人(58%)
	C 1人(3%)
製作物(ブックバック) 【技能, 知識・理解】	A 33人(86%)
	B 5人(14%)
	C 0人(0%)

(※A:4項目 B:3~2項目 C:1~0項目)

製作計画の記述の評価では、B評価(「知識・技能の4項目」について3~2項目の記載あり)が多い。その理由としては、持ち手を丈夫に縫うことの記述がなかったことがあげられる。しかし、実際の製作物の評価では、どの児童も、持ち手を丈夫に縫うことができていたため、33人(86%)がA評価(「知識・技能の4項目」を実現)となった。また、特徴的な児童の事例として、製作計画の記述でC評価(「知識・技能の

4項目」の記載が1項目以下)の児童は、実際の製作物では「知識・技能の4項目」全てが目標を実現しており、A評価となっていた。

全体的に見て、製作計画段階での知識・理解の習得は4項目全て目標に達していた児童は39%と十分ではなかったが、実際の製作物では86%の児童が十分に知識・技能を習得することができたといえる。このことから、製作計画時点では曖昧な知識が、製作場面で試行錯誤しながらも学習した事を振り返り活用することにより、確実な知識・技能の習得につながったことが分かる。

②創意工夫する能力の評価結果(活用する場面

①5~9時目)

ここでは、形も大きさも異なる布製品の製作段階において、2~4時目で習得した知識・技能を活用して工夫できるかという、創意工夫する能力の実現状況について分析する。その際、次の4項目(以後「創意工夫の4項目」という)に着目して分析を行う。

- ・ 目的に合った形や大きさの工夫
- ・ 製作物や目的に応じた布端の始末(二つ折り・三つ折り)の工夫
- ・ 中表にして縫うことの活用
- ・ 力がかかるところなどを丈夫に縫うことについての知識・技能の活用

この活用する場面①では、児童はペアで様々な製作物の製作計画と作品づくりに積極的に挑戦した。実際の製作物は表6のとおりである。

表6 製作物一覧

分類	製作物
バック系	○ビニル袋・チェック表入れ ○ビニールテープ・スズランテープ入れ ○貸し出し用ブックバック ○将棋入れ ○連絡棚プリント入れ ○磁石入れ ○落とし物入れ ○囲碁版入れ ○CDカバー&バック ○くじ入れ ○オセロ入れ
巾着系	○お盆きんちゃく ○コンパス入れ ○碁石入れ
カバー系	○ブックカバー ○ティッシュボックスカバー ○教卓カバー

ここでの評価は、製作計画作成時点での創意工夫する能力の実現状況と、製作後の作品に見られる創意工夫する能力の実現状況である。その結果を表6に示した。

表6 活用する場面①(5~9時)の評価結果

評価方法【観点】	評価結果	人 (%)
製作計画の記述 【創意工夫】	A	2人 (5%)
	B	28人 (74%)
	C	8人 (21%)
製作物(学校で使って 役立つ布製品) 【創意工夫】	A	14人 (37%)
	B	18人 (47%)
	C	6人 (16%)

(※A:4項目 B:3~2項目 C:1~0項目)

製作計画の記述の評価では、B評価が74%と多い。B評価の児童については、特に、「創意工夫の4項目」の中の「力がかかるところなどを丈夫に縫うことの知識・技能の活用」と「目的に合った形や大きさの工夫」ができていなかった(表7参照)。

また、C評価の児童8人(21%)については、4項目中実現できたのは、3人が「形や大きさの創意工夫」の1項目、2人が「中表にして縫うことの創意工夫」の1項目であり、他の3人の実現項目はなかった。また、「力がかかるところなどを丈夫にするための工夫」については、C評価の8人全員が実現できなかった。

表7 活用する場面①(5~9時)の「創意工夫の4項目」の実現状況

「創意工夫の4項目」	製作計画	製作物
	人 (%)	人 (%)
・目的に合った形や大きさの工夫	22 (58%)	36 (95%)
・製作物や目的に応じた布端の始末(二つ折り・三つ折り)の工夫	30 (79%)	30 (79%)
・中表にして縫うことの活用	30 (79%)	32 (84%)
・力がかかるところなどを丈夫に縫うことについての知識・技能の活用	6 (16%)	26 (68%)

以上の結果より、活用する場面①の製作計画時点では、児童にとって、「力がかかるところなどを丈夫に縫うことについての知識・技能」を活用することが最も難しく、イメージしにくかつ

たことが分かる。具体的には、バックの持ち手の部分を縫う際の工夫点が記述されていなかったことがあげられる。これらを踏まえると、知識・技能の習得のための指導時に、単に製作の手順のみを示すのではなく、その理由や必要性、科学的な根拠等にも触れ、知識・技能を異なる場面でも活用できるような転移性のある概念へと高める手立てが必要であったと考える。

次に、製作後の作品の評価について、製作計画記述時の評価と比較すると、A評価が2人(5%)から14人(37%)となり、12人(32%)増加している(表6)。また、4項目の内訳では、「目的に合った形や大きさの工夫」が22人(58%)から36人(95%)へと増加し、他の項目に比べて実現状況は最も高くなり、ほとんどの児童が実現できたことが分かる(表7)。これは、製作場面において、試行錯誤しながら適切な形や大きさにしようと創意工夫した結果であるといえ、実際に製作することの意義を感じさせる結果でもある。また、今回の題材構成において、知識・技能の習得場面において、ブックバックの使用目的に応じて一人一人が大きさの異なるものを作成したこと、その折にゆとりを考えながら大きさを決めた体験が生かされたといえる。

③特徴的な製作の例に対応した指導の必要性

活用する場面①における製作物に、特徴的な作品も見られた。図2の「教卓カバー」は、広い布を必要とするため、複数の布を縫い合わせている。しかし、布を2枚重ねて縫うに留まったため、布端が表面に出てきている。ブックバックを製作する際に、布を中表にして縫い合わ



図2 「教卓カバー」の布端の始末について

せることを習得したはずであるが、その知識・技能を活用することができなかった事例である。

図3は、三つ折りした布を中表にして縫い合わせた袋(将棋ケース)の事例である。これは、縫い代の布端をよりきれいに丈夫にするために工夫したものではあるが、重なり合った布が厚くなり、ごわごわとした仕上がりになっている。他にも6作品が同様であり、中表にして2枚の布を縫い合わせているものの、布端の始末を特殊な方法で仕上げていた。何れも、袋の内側の布端の始末を工夫した結果であった。児童の思いを製作物に適切に反映させるためには、発展的な取扱いとして、事前に児童の考えを想定しつつ、布端にステッチを掛ける方法などのヒントカード等を準備しておく必要がある。



図3 「将棋ケース」の布端の始末について

なお、どちらの場合にも共通していえることは、2枚の布を中表にして縫い合わせるという概念、つまり布特有の概念の不足である。布を使って作品を作る経験が少ない児童にとっては未知の世界でもあることから、布特有の概念をつかむためには、布製品に多く触れてよく観察し、その特徴を体感させることが必要であろう。例えば、題材の導入時に、いろいろな布製品を調べ、布製品の良さやその特徴を調べる学習活動を充実させることにより解決できるのではないかと考える。

④知識・技能(習得場面)と創意工夫する能力(活用する場面①の製作物)の関係

ここでは、知識・技能の習得場面で製作したブックバックとその後の活用する場面①で製作した各種の作品の製作計画及び製作物の評価結果

を比較し、知識・技能(習得場面)と創意工夫する能力(活用する場面①)の関係を考察する。

まずは、知識・技能(習得場面の製作物)と活用する場面①の製作計画表にみられる創意工夫する能力との関係を整理する(表8参照)。ブックバックの製作時には、全員がB評価以上でA評価は86%と高く、ほとんどの児童が必要な知識・技能を身に付けた状態であった。ところが、活用する場面①の製作計画では、A評価だった33人の児童のうち31人がB評価以下となった。つまり、製作に必要な知識・技能を身に付ければ、異なる場面でその知識・技能を活用して自由に製作計画を工夫できるということではないことが分かる。

表8 知識・技能(習得場面の製作物)と創意工夫する能力(活用①の製作計画)との関係 <人(%)>

		創意工夫(活用①の製作計画)			
		A	B	C	合計
知識・技能 (習得場面の製作物)	A	2 (5%)	24 (63%)	7 (18%)	33 (86%)
	B	0 (0%)	4 (11%)	1 (3%)	5 (14%)
	C	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	合計	2 (5%)	28 (74%)	8 (21%)	38 (100%)

(※A: 4項目 B: 3~2項目 C: 1~0項目)

次に、知識・技能(習得場面の製作物)と活用する場面①の製作物に見られる創意工夫する能力との関係を整理する(表9参照)。ここでも、表8と同様に、習得場面でA評価であった児童のうち20人が活用①ではB評価以下へと変化した。

表9 知識・技能(習得場面の製作物)と創意工夫する能力(活用①の製作物)との関係 <人(%)>

		創意工夫(活用①の製作物)			
		A	B	C	合計
知識・技能 (習得場面の製作物)	A	13 (34%)	15 (39%)	5 (13%)	33 (86%)
	B	1 (3%)	3 (8%)	1 (3%)	5 (14%)
	C	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	合計	14 (37%)	18 (47%)	6 (16%)	38 (100%)

(※A: 4項目 B: 3~2項目 C: 1~0項目)

こちらは製作物同士の比較であることから、1回目の製作時に身に付けた知識・技能を次の異なる場面で工夫して活用できるかという見方にも繋がるものである。その結果、約3分の1の児童(13人)は十分に活用して工夫できたといえるが、太枠で囲んだ21人の児童は十分に活用できなかったといえる。

このことは、言い換えると、A評価13人の児童の知識・技能は、製作計画づくりや2度の製作を通して、異なる条件下でも活用できる知識・技能にまで高まっている(概念化された)といえる。この活用できる知識・技能を身につけることが、家庭生活での実践時に大いに役に立つと考えられることから、家庭科の最終目標「生活をよりよくしようとする実践力の育成」を実現することにもつながると考える。

以上の結果から、今回の題材構成の軸ともいえる「知識・技能を活用する場面①, ②」をつくることの重要性が見えてくる。今回は、活用場面①のみの評価結果を示したが、次の活用場面②の学習活動を通して、全ての児童の評価結果がA評価となることが理想である。

4. 1枚ポートフォリオの活用による関心・意欲の分析

製作計画を作成するためのワークシートに加え、1枚ポートフォリオを準備し、児童に記入させた(図4)。このポートフォリオは、「習得場面」「活用場面①」「活用場面②」で身に付けた知識・技能や創意工夫した視点を記入できる紙面割りとなっており、最初に作ったブックバックで用いた知識・技能が次の製作物でも使われていることや創意工夫の視点が広がっていることなど製作物同士のつながりが一目で分かるようになっている。

この1枚ポートフォリオを用いて、児童は自分の学習を見通すとともに、その足跡を振り返り、学習活動のつながりを意識することができた。図5のように、製作物の写真を貼り工夫点を記入することにより、製作時に自分が使った知識や技能、工夫点を可視化することができ、児童のメタ認知へともつながるものである。また写

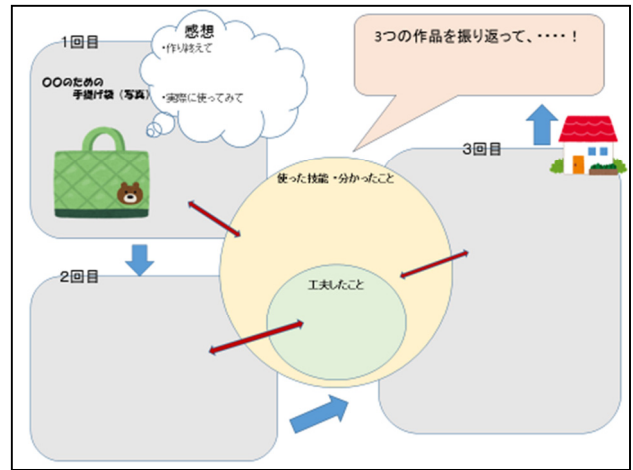


図4 一枚ポートフォリオ

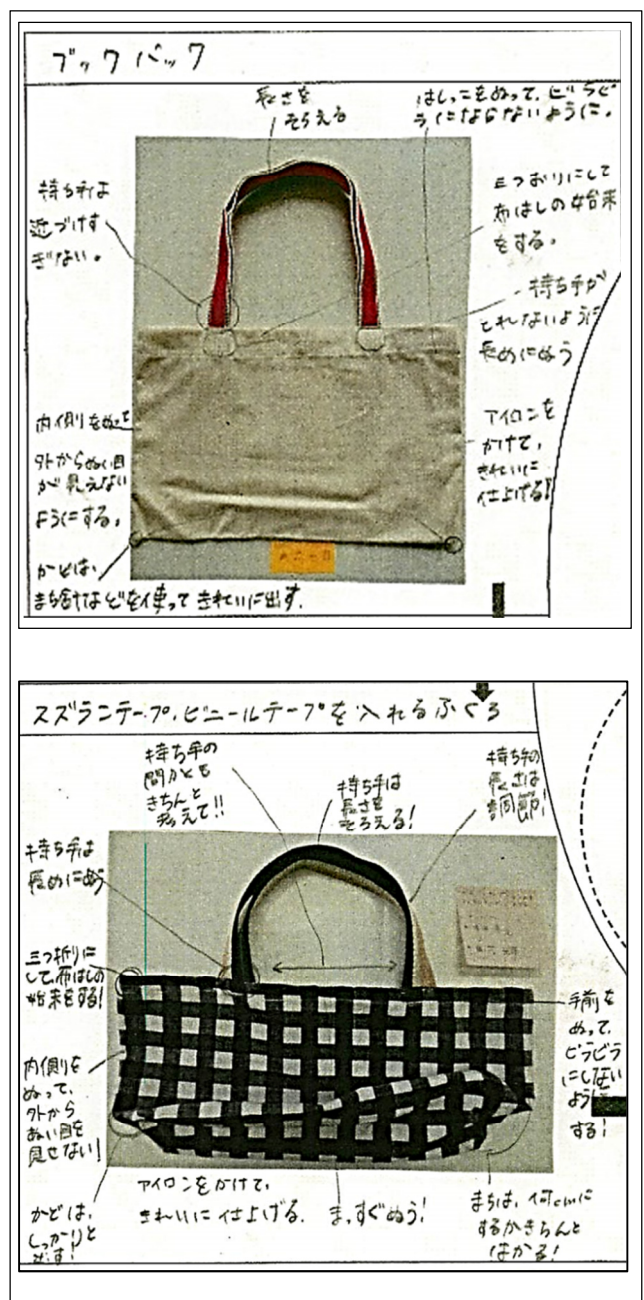


図5 一枚ポートフォリオ製作物写真への書き込み

真に記述した内容を、図6のように集約することで、製作時に必要な知識・技能や創意工夫する部分の共通点が明らかとなり、布製品を作るための資質・能力を育むことへとつながったと考える。

次に、1枚ポートフォリオの中の「使ってみての感

想」に記述された内容を見ると、「生活に役に立っている・生活が便利になった」という有用感を感じている児童が最も多く、11人(25%)いた(表10)。具体的には、「持ち手を付けたので、

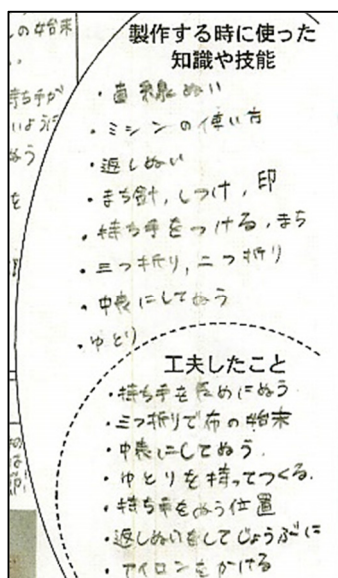


図6 製作から導かれたこと

表10 使用後の関心・意欲について(複数回答あり)

ポートフォリオに書かれた内容	人(%)
生活に役立っている 生活が便利になった	11(25%)
丁度良い大きさにできた	8(18%)
課題点を見つけた	6(14%)
使いやすい	6(14%)
丈夫にできた	5(11%)
自分が作りたいものが完成できた	3(7%)
明るくなった・オシャレになった	3(7%)
安全に作れた	1(2%)
他のものにも使えそう	1(2%)

どこにでもかけることができ便利だなと思いました。」(A児),「(教卓が)汚れないで、見た目もオシャレになった。」(B児)などである。以上のように、有用感を感じることで、製作への意欲も高まっていくと考えられる。2番目に多かったのは、「丁度良い大きにできた」との感想である。具体的には、「将棋がぴったり入るので、持ち運びしやすいです。」(C児)などである。これは、目的に応じた形や大きさを考えるように、目標を立てていたためだと考える。「自分が思っていた形より

も小さくなったので、今度つくるときは気をつけよう。」(D児)といった「課題点を見つけた」児童は、「次は気を付けて製作しよう」と次の活動への意欲も高めることができていた。

IV. 考 察

本研究においては、第6学年「思いを形に生活に役立つ布製品」において、題材における知識・技能を明確化し、「知識・技能を活用する場面」を中核に据えた授業実践に取り組み、結果を分析した。その結果、次のことが明らかとなった。

- ・製作計画時には知識の活用ができなくても、実際の製作を通して知識・技能を活用し工夫する能力が高まっていくこと。
- ・習得場面において身に付けた知識・技能であるが、製作物が変わるとその知識・技能を活用して工夫することが困難になる場合があること。
- ・知識・技能を活用する能力を高めるには、知識・技能を効果的に活用させる場面の設定が効果的であること。
- ・習得場面の個別の知識・技能を、活用できる知識・技能にまで高めるための手立てや教師の意識が必要であること。

今後は、家庭実践に向け、知識・技能を活用する能力をより一層育む題材や指導の在り方について探っていく。そのためには、習得場面において、活用できる知識・技術の習得のための指導の工夫、さらに、2つの活用場面を含む題材全体での活用する力の育成のための指導の在り方について研究を深める必要がある。

【参考文献】

国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校 家庭)』平成23年11月
文部科学省『小学校学習指導要領解説 家庭編』平成20年8月